

魔女と王様

とつても小さな九つの国——3

あわなみりようさく

49 でも、あの人が

ケーリアは考えていました。この幸せそうな顔を見ているかぎり、ローズンと恋に落ちた男とあのニーダマ王が同じ人間とは、とても思えないほどでしたから。でも、ニーダマなんていう名前はもともと多くはありませんし、王子と同じ名前をつけるなんてことは、エックエックの国では考えられないことでした。

うわきでは、ニーダマ王は十年ものあいだ行方知らずになつていたのですから、これはもうローズンの魔力のせいにはありません。ケーリアは心を決めました。

「ローズン」

「なあに、ケーリア？」

ローズンが無垢な微笑みを返します。

「もうすぐ赤ん坊が生まれるとなつちゃあ、放つてはおけないよ」「え？」

「あんたをリングガリンガへ連れて行こうね。あつちなら、大勢の魔女がいる。ひとりで赤ん坊を育てるなんて、考えちゃいけないよ」

「でも、あの人がここに帰って来るのよ……」
ローズンは不安を隠せません。

あれ、ローズンはたったひとりで暮らしているのでしょうか？ たしか、父親が猟に出ていたのではありませんか？

いいえ、それは、ローズンがニーダマについたたった一つのうそでした。魔女は大人になると、親の元を離れてひとりで生きることになってしまったから、とうぜん、ローズンの父親だつて一緒に住んではいません。こんな森の中にたったひとりで住んでいることを不思議に思われないう、と

つきに出てしまったうそだったのですね。

「大丈夫だよ、あたしを信じなさい。その人がここに来たらすぐわかるように、森に魔法をかけておいてあげるからね」

「まあ、ケーリア！ 優しいのね」

「ふふふ、可愛いローズンの赤ん坊のためだもの、何でもないさ」

ケーリアはそう言うのと、さつと外へ出て杖を振り回しました。七色の光がローズンの家に、そして周りの樹々にふわりと注がれます。

「きれいな……」

ローズンはおなかの赤ん坊に話しかけるように、つぶやきました。

やがてケーリアは満足そうにうなずくとローズンの元へ戻り、ぼつとマントを広げました。マントがローズンの体を包みます。

「行くよ」

ローズンが返事をするより早く、二人の体は宙に浮いていました。あつと
いう間に扉を抜け、緑色の光の中を、二人の魔女は飛んで行きました。

西へ西へ、リンガリンガへ！

〈つづく〉